

那珂市道徳郷土資料集

ひまわり

～未来をつくる子どもたちへ～



那珂市教育委員会

ひまわり

那珂市道徳郷土資料集

もくじ

①	四ひきのきつね（1、2年生）……………	2
②	もえちゃんともみの木（1、2年生）……………	6
③	よくがない（たつつあい話）（3年生）……………	10
④	曲がり屋の見学（3年生）……………	12
⑤	古徳沼のしぜんをまもる（4年生）……………	17
⑥	人を思う気持ち―秋山美代（4年生）……………	22
⑦	那珂かぼちゃ（5年生）……………	26
⑧	さつまいもの神様―白土松吉（5年生）……………	31
⑨	大助祭（6年生）……………	36
⑩	静のムクノキ（6年生）……………	41
⑪	地域の発展に尽くす―宮本逸三（7年生）……………	52



コラムのページ

⑫	マイナスからの脱却―岩上二郎（7年生）……………	54
⑬	伝統の文化を守る―倭文織り（8年生）……………	58
⑭	二十五万本のひまわり畑（8年生）……………	61
⑮	阿弥陀寺のしだれ桜（8年生）……………	65
⑯	教育にかけた命―青山信一郎（9年生）……………	68
⑰	覚悟を決めた一瞬―中井川浩（9年生）……………	72
⑱	こころざしを果たす―根本正（9年生）……………	76

那珂市ゆかりの人々……………	81
那珂市の名誉市民……………	80

那珂市の地域自慢No.1「那珂市ブランド」……………	46
那珂市の地域自慢No.2「見どころ・イベント」……………	48
那珂市の地域自慢No.3「古くから伝わるもの」……………	50





この本を使うみなさんへ

那珂市教育委員会教育長 秋 山 和 衛

この本のお話に出てくる先人や、古くから伝わるもの、昔ばなしや行事などは、すべて那珂市に深いつながりがあるものです。

那珂市に生まれ幼い頃から夢をもち、努力の末に夢をかなえた人のお話、勇気をもって困難に立ち向かい、未来を切り拓いた人のお話。親から子へ、そして孫へと語り継がれてきた昔ばなしや伝説。大切に守られてきた多くの行事や、美しく豊かな自然のお話。一つ一つのお話からは、人間の強さやすばらしさ、地域の伝統の奥深さや自然の豊かさが伝わってきます。また、多くの人たちが、それぞれの「生き方」の中で、那珂市を愛し大切に守ってきたということも、理解することができます。きっと、みなさんが住んでいる身近な地域のお話も入っていることでしょう。

この本を使うみなさんには、私たちの那珂市にも、素晴らしい業績を成し遂げた人々がたくさんいることや、古くから伝わる貴重な歴史的、文化的な遺産が数多くあることを知ってほしいと思います。その上で、この那珂市に生まれ、那珂市で育っていくことに喜びと誇りを感じてほしいのです。



道徳どうとくの時間じかんは、

心こころの中なかをしっかりと見みつめ、

今いま思おもっていることことを話はなし合あう時間じかんです。

真剣しんけんに考かんえれば考かんえるほど、楽たのしくなります。

「なるほど、そうなんだ。」

「やっぱりそうだね。」

など、新あたしい発見はっけんや気きづきをしながら、

「それっていいな、そんな自分じぶんになりたいな。」

という、よりよい自分のイメーえがジを描えがいていきます。

友ともだちや先方せんせいがたとの話はなし合あいをおして、

未来みらいの可か能のう性せいを広ひろげていきましよう。



四^{よん}ひきのきつね

しず
瓜^{うりづら}連^{しず}の静^{ちく}地区

むかし、しずの森^{もり}に、四^{よん}ひきのきつね
の兄弟^{きょうだい}がすんでいました。

一^{いちばんめ}番目はげんたろう、
二^に番目はじんじろう、
三^{さん}番目はもんざぶろう、
四^{よん}番目はしろうすけとい
いました。村人^{むらびと}は、いつ
のころからか、そうよん
でいました。



水とみどりにかこまれた、しぜんがゆたかなところで、兄弟なかくくらししていました。

ある日のこと、森の中を歩いていると、二人の村人が話している声が聞こえてきました。

「ちかごろ、きつねが わるさす
る話を聞いたど。」

あんめえ
ないだらう

「四ひきのきつねじゃあんめえ。
あいつらは、わるさはしねえ。
しかし、こまったもんだなあ。」
ほかのきつねたちは、わるじえ
をはたらかせて、人をだました
り、畑をあらしたりと、いたずら





をして人びとをこまらせていたのです。

兄弟ぎつねは、そうだんしました。

「同じきつねのなかまなのに、なんてことを…。」

「人間たちにもうしわけない。」

「わたしたち兄弟は、力を合わせて、人間のためになることをやろう。」

いたずらをするきつねのかわりに、よいことをしようと、四ひきのきつねたちは自分たちが
できることを考えました。

一番上のげんたろうぎつねが、

「わたしはふるさとの川をまもう。」

と言いました。すると、じんじろうぎつねが、

「それでは、わたしは野をまもりましょう。」
と言いました。



じょうふくじ 常福寺にあるげんたろう稲荷 いなり



ちゅうしゃじょう らぼーる駐車場にあるきつねの像 ぞう

また、もんざぶろうぎつねが山やまを、しろうすけぎつねが海うみをまもることになりました。

四ひきのきつねは、昼ひるも夜よるも走はしりまわり、はたらきつづけました。

おかげで、川からはたくさんさかなの魚や貝かいがとれました。野では、米こめややさいの作り方つくかたを教おしえ、たくさんさくもつがとれました。山では、家いえづくりにつかう土つちや石いしのありかを教えました。海では、大おおきな魚のいばしよを知しらせ、しおのつくりかたを教えたのです。兄弟ぎつねの力で、人びとの生活せいかつはゆたかなものになっていきました。

人びとは、四ひきのきつねにかんしゃし、ちいきのまもりがみとしてたいせつにしました。

出典 しゅつてん 筑波書林 つくばしゅりん 「瓜連町の昔ばなし」 うりづらまちむかし 楠見松男著 くすみまつおちよ

もえちゃんともみの木^き

みなさんは、なか市にある植物園^{しよくぶつえん}を知っていますか。とても広くて、たくさん^{ひろ}のきれいなお花^{はな}やめずしい植物などがあるところです。今日^{きょう}も、そんな植物園で、ふしぎなできごとがおこりました。

「植物園に行ってくるね。」

もえちゃんは、元気^{げんき}にげんかんをとび出^だします。もえちゃんは、一年生^{いちねんせい}のときに遠足^{えんそく}に行^いってから、植物園がすっかり好きになっ^なてしまいました。

「えっ、また……。あなたのお花には、ちゃんとお水^{みず}をあげたの？」

お母^{かあ}さんの声^{こえ}が遠くから聞^きこえます。『帰^{かえ}ってきたらね。』先月^{せんげつ}自分^{じぶん}で作^{つく}った花^かだんをよこ目^めで見^みながら、もえちゃんは心^{こころ}の中^{なか}でつぶやくと、風^{かぜ}のように通^{とお}りすぎました。

「だって、おうちのお花はお話^{はなし}してくれないもの……。」

「こんにちは！」

顔見知りになったうけつけのおばさんにあいさつをして、入り口をくぐります。夏の青空が広がるとても気持ちのよい日です。しんきゆうをする、花や木などのしぜんのかおりがいっぱい。もえちゃんはうれしくなりました。そして、お気に入りのもみの木の下ベンチに、ストン、とこしを下ろすと、目をとじて大きく一つ、いきをすいこみました。

「今日は、どんなお話しが聞こえるだろう？」

「おーい、おーい！」

いつもとはちがう、大きくてはりのある声がします。もえちゃんはあたりをきよろきよ見わたして、最後にもみの木を見上げました。

「もみの木さん？」

もえちゃんはちよつとびっくりして、もみの木を見上げます。

「遠足のときに、だるまさんがころんだをいっしょにやったから、もえちゃんにはぼくの声が聞こえるんだね。」

「ええ、そうよ。でも、おうちのお花は何もお話ししてくれないの。」

「そうかな？それはもえちゃんが、聞こうとしていないからじゃないのかな。」

もえちゃんは、ふしぎそうな顔をして、目の前の^{まえ}花だんの花たちを見わたしました。

「今日も気もちがいいわね。お水もたくさんもらえたし、お日さまもきら

きら。その上、草^{くさ}もなくてフワフワ土のベットよ！」

お花たちの声に、もえちゃんははっとしました。もみの木が、

「ここのお花も、もえちゃんのおうちのお花たちと同じ。耳をすませば、きっとお花の声が聞こえるはずだよ。」



と言って、声が遠ざかっていきました。

いっしゅん、今までかいたことのない、とてもよい花のかがりがしました。そして、ヒューとあたたかい風がふき、目の前の花たちは、夏の風を

うけながら、ただゆらゆらゆれているだけでした。

「今日は早くうちに帰らなきゃ。」

もえちゃんは、少しはずかしそうに一人ごとを言って、植物園の出口の方へ走り出しました。



一年がすぎ、きゆうり
ようをわたすときがきま
した。



はて、一月分とは、
どのくらいの米を
やったらよいのだ
ろう。

金もちは、どう計算し
たらよいかわかりませ
ん。そこで、てんごんし
に計算をたのみました。

※てんごんし
計算をする人。

だんなさま。たつあいに
らう米つぶの数^{かず}は、※五おく
三千六百八十七万^{まん}つぶでござ
います。



そ、そんなにたくさん。それ
では、ほかの人にもきゆうり
ようをはらえない。

※一し^{いち}ょうを六万つぶとす
ると、やく一三トン（一
三〇〇〇キログラム）。

金もちは、しはらいを
まってくれるよう、たつ
あいにたのみました。

たつあいよ。どうか、しは
らいをのばしてくれないか。



しかたがない。少しまってや
ろう。これにこりて、自分の
お金をふやすことばかり考
えるのは、やめることだ。

すまない。少しずつでも米
つぶはかならずせんぶわた
す。それで かんべんして
おくれ。



こうして、たつあい
は、たくさんの米^{こめ}をいた
だきましたと。

「たつあい」とつたえられ
ている「大谷達才^{おおや たつさい}」のはか
(那珂市額田^{なかし ぬかだ} 引接寺^{いんじようじ})



曲まがり屋やの見学けんがく

曲まがり屋

昔むかしから伝つたわる民みん家の建たて方かたのひ
とつ。農のうぎよう業ぎように使つか
う牛うしや馬うまをかう
部屋へやも母屋おもやの中
にある。

けい君たち三年生は、今日、社会科の校外学習で那珂市菅谷なかしがやにある「曲がり屋」に見学に来ています。多くの三年生は、じっさいに曲がり屋に来るのは、はじめてのようです。

「近くで見ると大きいね。」

「屋根には、わらのようなものがつんであるよ。」

「縁側えんがわが広くて家の中は風通しがよさそうだね。」

「今の、ぼくたちの家とはずいぶんちがうよ。」

みんなは、口ぐちに、思い思いの感想かんそうを言い合いながら、曲がり屋の中に入っていました。

けい君もわくわくしながら、大きな玄関口げんかんぐちをくぐっていきます。

「なんかけむりのおいがするな。それに、少しあたたかいな。」

けい君は、入り口の大きな木戸きどをくぐりながら、ふしぎそうに中の様よう

土間^{どま}
住宅^{じゅうたく}の中で、地面^{めん}のままのところ。日本^{こく}古来の民家^{みんか}でみられる形式^{けいしき}で、土足^{どそく}でつかう場所として、げん関^{かん}や台所^{だいどころ}、部屋^{へや}の一部としても使った。

子をさぐりました。

「かまどを見るのははじめてかな？」

よく見ると、入り口のおくの
広くなっているところで、だ
れか一人立っていました。

「おどろかせてごめんね。今
日は来てくれてありがと
う。わたしはここで、ボラ
ンティアでかん理人^{りにん}をして
いる者だよ。ここは、土間^{どま}
といって、玄関であり、台
所であり、作業をする場所
でもあるんだよ。火をもや
しているのは、かまどと



「いって食べ物にたきするところだよ。」

と、おじさんが教えてくれました。

「えーっ、すごい。玄関に台所があるんだ。しかも、ゆかは土なんだね。」

と、けい君が言いました。お話を聞いていた子どもたちも、感心かんしんしたような声を上げました。

「台所だけではないよ。入り口の右がわに、もう一つ部屋へやがあるだろ、だれの部屋かわかるかな？」

と言いながら、おじさんは、入り口わきの部屋を指ゆびさしました。

みんなは首をひねって、顔を見合いました。すると、おじさんが、

「この部屋はね、家でかっている馬たちの部屋だったんだよ。」

と、言いました。そして、次のようなせつ明をみんなにしてくれました。

茅葺き屋根

ススキやチガヤ
という植物を屋
根の材料ざいりようとして
重ねて使った屋
根の作り方。

「今、ここにある曲がり屋は、那珂市戸崎なかしとぎきにあったじっさいの農家のうかだっ

たんだ。その農家全体を、茅葺^{かやぶき}家屋^{かおく}をふくめて、一度ばらばらにして、ほぞんのために、一の関^{せき}ため池^{しんすい}親水公園^{しんすい}内へうつし、もう一度組み立て直したんだよ。曲がり屋^{いつたい}とは、人が住^すむところと、馬小屋、物おきが一体^{いつたい}となった東北^{とうほく}地方^{ちほう}と茨城^{いばらき}県の一部に見られる、寒さのきびしい地方の代表的な家のたて方なんだよ。」

おじさんは、このようにせつ明^{あつめい}した後、みんなの顔を一度じっくりと見わたしました。そして、にっこり笑^{わら}うと、最後^{さいご}にこんなお話をしてくれました。

「昔の人たちは、自分たちと一しよにはたらい



てくれる動物たちのことも、家族の一員として考えたんだよ。そして、身の回りの全ての物を何でも大切にしたんだ。だから、この家の中にはむだな物は何一つとしてない。一つ一つの物に、使う人のくふうや思いがこめられているから、わたしはいつまでも大切にしたいと思っていますよ。今日は、そんな昔の、生活のくふうを、たくさん見つけていってね。」

おじさんの話を聞き終わると、けい君は、広い家の中をぐるっと見わたしました。すると、けい君たちは、今までただの古い道具にしか見えていなかった物たちが、何だかとってもがんじょうで、どっしりとした宝物にみえてきました。

古徳沼ことくぬまのしぜんをまもる

古徳沼

瓜連うりづらの古徳地区ことくちくにある沼。
毎年まいとし、冬に白鳥はくちょうがあつまる。



冬の日曜日の朝です。

さとしは、夜が明ける前に起きおきました。今日は、お父さんといっしょに、古徳沼に行くやくそくをしていました。

「寒いなあ。お父さん、本当に今から写真をとりに行くの。」

「もちろんさ。このカメラ

でとると、きれいな写真がとれるんだ。早く用意をするんだぞ。」
お父さんは、カメラをなでながら、わらって言いました。



冬になると、古徳沼にはたくさんの白鳥が集まります。きらきらと光る水。真っ白な羽はねや足ひれを動かして、えさを食べる白鳥たち。よい写真をとろうと、県外からも多くの人がおとずれています。

さとしとお父さんは、沼に近づいてみました。

「わあ。白鳥がいっぱいいる。」

「びっくりしたかい。これで、百羽ひゃっぱはこえていると思うよ。でも、さい

しよは二・三羽わくらいだったんだ。」

「どうして、こんなにふえたの。」

さとしはふしぎに思って、たずねました。

「さいしよは、えづけにせいこうしたんだ。」

「ふうん。えさがほしくて、だんだん白鳥がとんで来るようになったんだね。」

「うん。でも、それだけではないんだよ。」

お父さんは、ゆっくりと歩きながら、あたりを見回しました。

えづけ
えさをあげるこ
と。



野鳥の写真

年号	羽数	年号	羽数	年号	羽数	年号	羽数	年号	羽数
昭和41年度	2羽	昭和51年度	74羽	昭和61年度	142羽	平成8年度	112羽	平成16年度	126羽
42	3羽	52	67羽	62	148羽	9	96羽	19	135羽
43	5羽	53	56羽	63	148羽	10	160羽	20	153羽
44	10羽	54	71羽	平成元	182羽	11	98羽	21	85羽
45	15羽	55	110羽	2	238羽	12	133羽	22	149羽
46	13羽	56	115羽	3	155羽	13	158羽	23	107羽
47	24羽	57	101羽	4	211羽	14	160羽	24	95羽
48	25羽	58	130羽	5	222羽	15	82羽	25	88羽
49	29羽	59	136羽	6	176羽	16	65羽	26	88羽
50	37羽	60	182羽	7	135羽	17	126羽	27	88羽

白鳥飛来数

「白鳥はね、とてもびんかな動物だよ。だから、あまり人の手が入りすぎないように気をつけて、かんきようを整えてい
るんだよ。」

「なるべくしぜんに近いかたちで、きれいにしているんだね。」
「そうなんだ。那珂八景にもえらばれている場所だから、かん

光地としても多くの人にきてもらいたいしね。人と自然が
いっしょに気持ちよくすごせる場所を作っていくことが大切
なんだ。」

さとしは、かん光きよう会の人がけいじしている、毎年の白
鳥飛来数の表や野鳥の写真を見ながら、うなずきました。

写真を取り終えてちゅう車場に向かうと中、さとしは、木で
できた階段だんを見つけました。

「お父さん、あの階段だんは何かな。」

見ると、沼のうら山へ歩いて行くことができるよう、きれい

な道ができていました。

「ああ、あれはね。静・古徳古道と言^{しず}って、少し前に整^{せい}びされたんだ。おじいちゃんがこの間、話をしていただろう。」

さとしは、おじいちゃんが新聞の切りぬきを見せながら、話をしてくれたことを思い出しました。

まだ、ざん暑^{しよ}がきびしい九月に、地いきの方の力をかりて、いっしょに草かりをしたり、のびたつるなどを切ったりしたこと。その後も、手入れをしてくださり、四年かけて整^{せい}びしたこと。那珂^{なか}市のかん光ガイド



整^{せい}びされた静・古徳古道



ブックにさん歩道^ぽとして地図がのったことなど、おじいちゃんはうれしそうに話をしてくれました。

「山をあらさないことで、いのししのひがいもへって、沼^{ぬま}のしぜんも守られるんだ。」

と、木々を見つめながらお父さんが言いました。

「うん。ぼく、あたたかくなったら、おじいちゃんとの道を歩いてみようかな。」

さとしは、ゆっくりと歩き出しました。

朝日にてらされて、古徳沼^{みなも}の水面がきらきらと光り、白鳥たちの声がひびいています。

人を思う気持ち

— 秋山 美代 —
あきやま みよ

「将来の夢は何ですか？」
しょうらい ゆめ

ある日のじゅ業で出された質問です。私は、考えこんでしまいました。どんな仕事につきたいか、なんて考えたことがなかったからです。なんとなく『人のためになる仕事をしたい』とは考えていましたが、具体的に何になりたいかまでは、考えていませんでした。結局、その日のじゅ業中に答えを出すことはできませんでした。

家に帰っても私は考えていました。

四年生の社会科では、地いきのために活やくした人々の学習をしていたので、参考にしてみようと考えました。いろいろな資料を調べてみると、ある女性を見つけました。「従軍看護婦 秋山美代」と書いてあり

従軍看護婦

戦争の時に軍隊
と行動をともに
し、ケガをした
兵隊さんたちの
手当をする看護
師。



ます。

「従軍看護婦。昔の看護師さんかなあ。」

私は秋山美代さんをもっと知りたいと思い、歴史民俗資料館へ行って、調べてみました。

秋山美代は、一八八九年那珂市額田に生まれた。

一九〇八年に日本赤十字社の看護婦になった美代は、病気の人のために一日中、時間をわすれて働いた。そんな姿がみとめられ、従軍看護婦になった。

シベリア

ロシアの中央部
から東側の範囲
で、冬の寒さは
厳しい。

そのころ、世界では大きな戦争が起きていて、兵隊さん^{へいたい}を助けるために、たくさんの看護婦さんが戦場^{せんじょう}へ向かった。戦場で兵隊さんを助ける看護婦さんを、従軍看護婦という。

とても寒いシベリアという国へ行ったときには、従軍看護婦長として一生けん命^{めい}、兵隊さんを助けた。

日本にもどってきたときには、災害^{さいがい}で苦しむ人を助けるために、日本全国、どこへでもかけつけた。

一九三九年、再び^{ふたたび}従軍看護婦として戦場へ。兵隊さんのきずを手当てしているとき、ばくはつにまきこまれて亡^なくなった。四十九才であった。

秋山美代さんのことを調べてみて、人のためにはたらくとは、どのようなことなのか、少しわかったような気がしました。ちよっただけ、

じゅ業の答えに近づいたように感じました。

次の日のじゅ業で、「将来の夢は何ですか」という先生の質問に、私はすっと右手をあげました。



秋山 美代

明治二十二年（一八八九年）那珂市額田東郷（ひがしごう）に生まれました。明治四十一年（一九〇八年）日本赤十字社に入社後、看護婦として活躍（かつやく）しました。大正九年（一九二〇年）、日本軍のシベリア出兵（しはい）に際（さい）し、救護班（きゅうごはん）九五看護婦長（しやう）として招集（しゅうしゅう）されました。その後も、戦（いくさ）いが起こるたびに戦地（せんち）へ出向（しゅっかう）き、多くの戦傷者（せんしやう）の手当（てうたう）に貢献（こうけん）しました。昭和十四年（一九三九年）戦傷者の手当（てうたう）をしている時に戦（いくさ）いに巻き込ま（ま）れ、命（いのち）を落としました。



「那珂市ゆかりの先人たち」より

那珂かぼちゃ

ぼくは、いらいらした気持ちで夕食のテーブルに
いた。

今日は、サッカークラブのレギュラー選手^{せんしゅ}発表の日
だった。コーチが発表したレギュラー選手の中に、ぼ
くの名前はなかった。四年生になれば、いろいろな大
会に参加できるようにするため、友だちのほとんど
が、この日を目指してがんばっていた。ぼくは、この
ままサッカーを続けるのが、いやになってしまった。

テーブルには、肉じゃがとかぼちゃの煮物^{にもの}がならんで
いた。

「おばあちゃんの畑でとれた、今年はじめてできた那



珂かぼちゃよ。」

お母さんはそう言うのと、ずっと、かぼちゃの煮物をぼくの前に差し出した。あまり食べなくなかったが、なやんでいることを知られなくなかったから、とりあえず、煮物を口にした。

「えっ、これいつもののかぼちゃとちがう。」

思わずつぶやいた。

それを聞いていたおばあちゃんが、横から口をはさんできた。

「当たり前さ。私が心を込めて作った那珂かぼちゃだもの。そんじよそこらのかぼちゃといっしょにされちゃこまるよ。」

おばあちゃんはむねをはってそう言うのと、うれしそうにぼくの方を見た。そして、こう続けた。

「お前、今日学校で何かあったのかい。少し、元気ないよ。」

ぼくはあわてて、まだ口の中にのこっていた煮物を飲みこむと、おばあちゃんの質問しつもんには答えず、こう聞き返した。



「おばあちゃんは、どうして今でもこのかぼちゃを作り続けているの。たいへんな畑仕事なんかしないで、家で好きなことをしたり、のんびりしたりすればいいのに。」
ぼくは、ついおばあちゃんを問いつめるように言った自分の言葉にびっくりしていた。思わず目をそらしかけたぼくを、おばあちゃんはちよつとの間見つめると、にっこり笑って、こんな話をはじめた。

「私が畑仕事を始めたのは、もう何十年も前のことだよ。そのころは、家族が生きるためにはたらいたよ。畑の作物を売って、お金をかせいで…。おじいさんといっしょにひっしではたらいたよ。でも、今はちが



うね。理由は二つ。一つは、何よりも畑仕事が好きだからだよ。たねをまき、芽を育て、病気から守り、一生けん命育てた作物がおいしく育っていくのを見るのが、何よりも好きなのさ。」

そう言って、おばあちゃんは、目の前の那珂かぼちゃの煮物を、一切れ口に入れると、とてもおいしそうに目を細めた。

「じゃあ、もう一つの理由は何。どうして今でも続けていられるの。」

身を乗り出して聞くぼくに、おばあちゃんは、にっこりとほえんだ。

「それは、自分で考えてみなさい。お前も、何か続けているものがあるだろう。そのことを思いうかべて、考えてみるといいよ。」

ぼくは、おばあちゃんのその言葉にはっとした。おばあちゃんの目を見た。おばあちゃんは、あいかわらずわらっていた。

ぼくは、答えをさがすように、あらためてかぼちゃの煮物を見つめると、もう一切れをつまみ上げ、口に放り込んだ。

那珂かぼちゃ

有機質ゆうきしつを使った土作りで、徹底てつていした完熟かんじゅくによる良品作りを目指し、那珂市でつくられた「みやこかぼちゃ」です。那珂市ブランドにも指定ししていされています。

さつまいもの神様

— 白^{しら}土^と松^{まつ}吉^{きち} —

「秋になると、さつまいもほりが楽しみだな。」

「あまくてほくほくして…わたし、さつまいもが大すき。」

ところで、みなさんは、さつまいもの神様って知っていますか。

これは、九十年前ほどのお話です。

「あっ、いものまっつあんだ。」

「きょうも、はだしでさつまいもうえだっぺか。」

村人たちは、今日も、日に焼けて真っ黒になったまっつあんをみつめてこう言いました。

日照り

日が照りつけること。特に、真夏に晴天が続き雨が降らないこと。

そのころ、このあたりの農家では、おかぼ（陸稲）の栽^{さい}ばい^ひが中心でした。けれども、おかぼ作りは、たびたび日照^{ひで}りの害にありました。まっつあんは、日照りに強い作物はないかと考え、さつまいもに目をつ



くさりやすいのになあ。」

いつもいつも、さつまいも畑にいるまっつあんに、村人たちは、あきれてしまいました。それでも、まっつあんは、さつまいも作りにはげみました。

（また、しっぱいだ。どうしたらもっとたくさんいもができるんだ。何かもっとよい作り方は、ないだろうか。）

けました。さつまいもをたくさんしゅうかくして売れば、村の人々も助かるのではないかと考えたのです。それからというもののまっつあんのすがたは、さつまいも畑でいつも見られるようになりました。

「あんなにしくなくても、どうせいもはとれるのに。」

「たくさんとれたって、さつまいもは

高うね

高く盛りあげた
うね。排水・通
気がよいので、
水分の多い土地
や乾燥を好む作
物栽培時に用い
る。

千貫どり

一反（十アール）
当たりの収穫量
を千貫（三千七
百五十キログラ
ム）にすること。

まっつあんは、なえの植え方を、いろいろ変えてみたりしました。けれども、なかなか思ったようにはいきません。

（いもの話し声、なき声を聞く。）と言っては、畑にねとまりしました。また、たいひのよしあしをみるために、口に入れて味をみたりして、さつまいも作りを続けました。

さつまいも作りを始めて、十五年がすぎました。まっつあんは、高うねが、さつまいも作りによいということを発見しました。さらに、十五年の年月をかけて、「さつまいもの千貫どり」ができました。そのため、日照りでおかぼが育たない年があっても、さつまいものおかげで、生活にこまることはなくなりました。



白土松吉 顕彰碑（一の関ため池公園内）

まっつあんの願いは、とうとうかなったのです。

まっつあんは、こつこつとさつまいも作りを研究しながら、さつまいもが、この土地の作物としてたいへんよいことを農家の人たちに話して歩きました。

「なるほど、かわった作り方だな。」

「わたしもやってみよう。」

「もう、日照りがきてもだいじょうぶだ。」

はじめは、知らん顔をしていた村人たちも、真っ黒な体で、熱心にさつまいものすばらしさをとくまっつあんの話に引きこまれていくのでした。

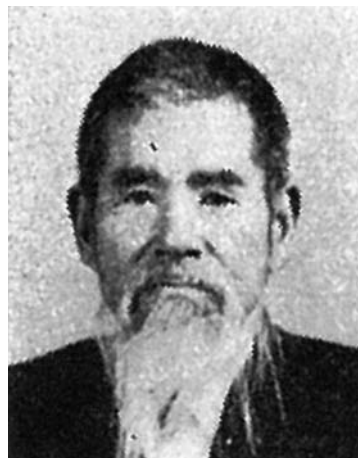
こうして、まっつあんこと、白土松吉は、村人たちから「さつまいもの神様」とよばれるようになったのです。

出典 (茨城県道徳郷土資料集) 茨城県教育委員会

白土松吉

明治十四年（一八八一年）現在のひたちなか市に生まれました。農学校を卒業後、那珂郡役所の農業指導員しどになりました。その後サツマイモの増産に力を注ぎ「千貫取り栽培法」と言われる方法を開発し、サツマイモの神様と呼ばれました。

那珂市の農業会の支部長を経て、「白土甘藷研究所」かんしよを開設し、研究に一生をささげました。



「那珂市ゆかりの先人たち」より

大助祭

おおすけまつり

鹿島神社

那珂市菅谷にある神社。大助祭の最後には、境内に全ての山車が集まり盛大に盛り上がる。

那珂市立菅谷すがや小学校の近くにある鹿島かしまじんじや神社は、鹿島神宮じんぐうの神様を分けてできた神社です。昔、一度なくなってしまうましたが、村の人達の「もう一度建ててほしい」という願いから、一八五五年に今の那珂市菅谷地区に再び建ふたてられました。とても昔からある神社です。



山車^{だし}

お祭りの時にお
囃子^{はやし}をえんそう
する人を乗せて
移動^{いどう}する飾り^{かざり}の
ついた出し物。

大助囃子^{おおすけばやし}

江戸時代末期

(一八五七年)

以来、大助祭に
山車^{ゆそう}の上で勇壮
に演じられたお
はやし。保存会
によって保存と
伝承^{でんしょう}が図^{えが}られて
いる。

鹿島神社では、大助祭という三年に一度、開かれるお祭りがあります。たくさんのおちんを下^{くだ}げた山車^{だし}や、五メートルの竹に七つのちようちんをつけた「七つぼんぼり」が町内をねり歩きます。山車の上には笛、小太鼓^{こだいこ}、大太鼓^{えんそう}を演奏する人が上がり、大助囃子^{おおすけばやし}を演奏します。小太鼓は小・中学生が演奏します。

私が小学校三年生のころ、大助祭が開かれました。

「うわあ、かっこいい。私も山車の上に乘って、太鼓^{たいこ}をたたいてみたい。」

四・五・六年生が一生けん命演奏している姿がとてもかっこよく見えました。「私も大きくなったら、太鼓をたたきたい」そう心に決めました。

三年後、小学校六年生になり、山車の上に乗ることができる学年になりました。「いよいよ太鼓を演奏できるぞ。」

地区の集まりで、私は太鼓をたたく役に真っ先に手を挙げました。

八月になり、太鼓の練習が始まりました。伝承^{でんしょう}音楽という練習方法です。

地元で育った方々が演奏する横笛に合わせて、見よう見まねで体で覚えていきます。楽譜^ふや決まった練習方法はありません。長い間伝えられてきた練習方法です。高校生やご年配の方々に見てもらいながら、私は一生けん命練習しました。

お祭りの前日には、地区の方々と山車の組み立てと、かざり付けをし



ました。この日、山車の上で初めて演奏しました。とてもわくわくしました。演奏しない子ども達は山車を引っ張って動かします。地区の方々全員が、明日のお祭りのために、準備をしていきます。

「ピーヒョロー」「ドン。ドドドン。」

お祭りの日。たくさんの方々と、一日中いっしょに過ごしました。私は、山車の上で一生けん命演奏しました。あつという間に時間は過ぎていきました。

お祭りの最後は、九つの地区の全ての山車が鹿島神社に集まって、いっせいに大助囃子を演奏します。神社に集まった人達の気持ちが一つになったように感じました。

「一生けん命、太鼓をたたけた。けど、それよりも…。」

いつの間にか、大助祭に参加する私の心は、三年前とは、大きく違うものになっていました。太鼓をたたけたこととはまた別な、満足感でいっぱいになっていたのです。

大助祭の太鼓をたたきたいという、おさないころの夢はかないました。三年後、私は中学三年生になります。次の大助祭には、これまでとは違った気持ちで参加できるような気がしました。

大助祭

現在は三年に一度の八月十五日に行われ、「菅谷のちようちん祭」や「大助祭」とよばれています。数百ものちようちんをぶら下げた各地区九台の山車の繰り込みとご神刀しんとうによる火切り神事しんじなどが最大の見どころとなっています。

静しずのムクノキ

「大きな木だね。」

「ずっとここに立ってるの？」

その男の子は、お父さんにたずねました。すると、お父さんは、

「そうだよ。お父さんが生まれる前から、そして、おじいちゃんの生まれる前から、そのまたおじいちゃんの生まれるもっと前から、ずっとね。」

その木とは、那珂市瓜連かつらぎの桂木稲荷神社境内けいだいに生育する、通しよう「静のムクノキ」です。

この木には、こんなお話があるのです。

応徳三年おうとく、今から九百年以上も前のことです。

前九年の役

(一〇五一年)

東北地方の豪族
と朝廷側武将が
対立した戦乱。

出羽

東北地方の旧国
名の一つ。山形・
秋田両県にまた
がる地域。

陸奥

東北地方の古い
呼び方の一つ。
福島・宮城・岩手・
青森の四県に相
当する地域。

後三年の役

平安時代後期、
東北地方を舞台
とした戦い。前
九年の役の後、
藤原氏が登場す
るきっかけと
なった戦い。

平安の時代、出羽の清原氏、陸奥の安倍氏という東北地方を支配して
いたごう族がいました。ところが、この二人のごう族が対立し「前九年
の役」「後三年の役」という奥羽をぶたいとする、歴史に残る大きな合
戦があいついで起こります。

「前九年の役」は、多賀国府にいた將軍源頼義、義家親子が出羽の
豪族清原氏の助けを借りて、陸奥

奥の豪族安倍氏をめつぼうに追
いこんだ「北方の王者」の交代
劇ともいえる戦いでした。その
後、清原一族の間に内ふんが生
じ、「後三年の役」が起こりま
す。この内ふんにうまくかい入
したのが源義家でした。

東征してきた源義家が戦勝を



東征^{とうせい}

軍隊などが東方に行くこと。日本では関東や東北地方に軍を進めるときに使われた表現。

き願したと伝えられているのがこの神社です。

その時、義家は、何としてもこの戦^{いくさ}に勝利し、陸奥の混乱を収めようと言う強い思いを胸に、持っていたムチを神社のかたわらにさしました。そのムチが根付いたのがこのムクノキといわれています。

このムクノキは、ムクノキとして生育できる北限^{ほくげん}のきよ木としてめずらしい木とも言われています。

九百年以上も前から、ずっとここに立ち、雨の日も風の日



も、人々の歴史を見守ってきました。境内で遊ぶ子どもたちをいつの時代も見つめてきました。ずっとずっと昔から今まで、親から子へ時代が流れていく様をじっとここで見てきたのです。

ほら、さわってみて…

ムクノキを

聞こえる

感じる

長い歴史の足あとを

時代の

いぶきを



「那珂市を
知ろう。」

もっと

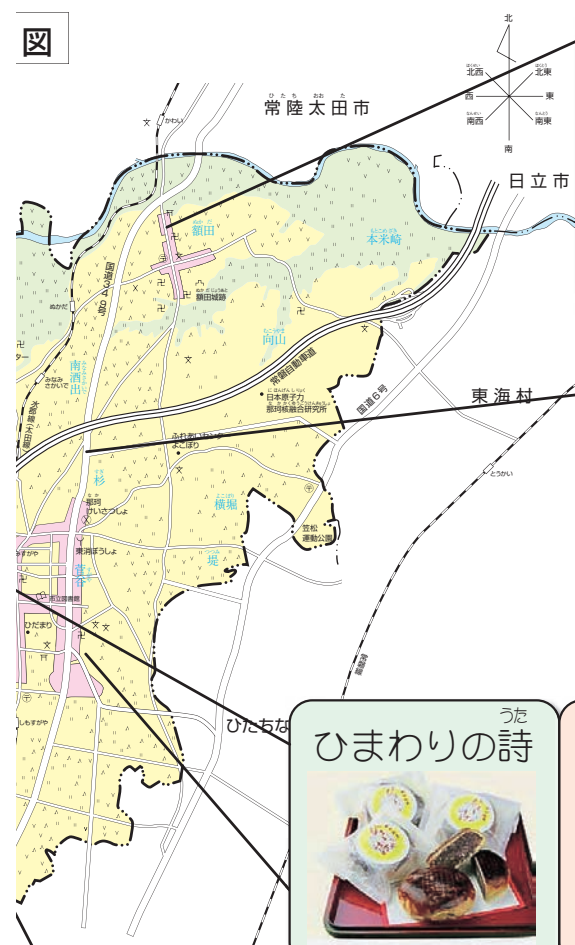


「那珂市ブランド」

くりを進めるために、那珂市らしい商
 広く紹介し、那珂市のよさを多くの
 を目的としています。



図



つぼ焼き



焼きドーナツ



ひまわりっこ
なめらかプリン



シフォンケーキ



ひまわりの詩



かぼちゃ
まんじゅう



ひまわり
コロッケ



七運クグロフパン



那珂市にも、古くから伝わるものや新しく開発された名産品がたくさんあるね。



ち い き じ ま ん
那珂市の地域自慢 No.1

那珂市ブランドを知っていますか？

那珂市では、地元^{じもと}の産業を盛り上げ元気で活力あるまちづくりのブランド化を行っています。『那珂市特産品ブランド』を人々に知ってもらい、那珂市の魅力^{みりょく}をさらに高めていくこと

ひまわり
ドレッシング



青大豆味噌



青大豆豆腐



ネストビール



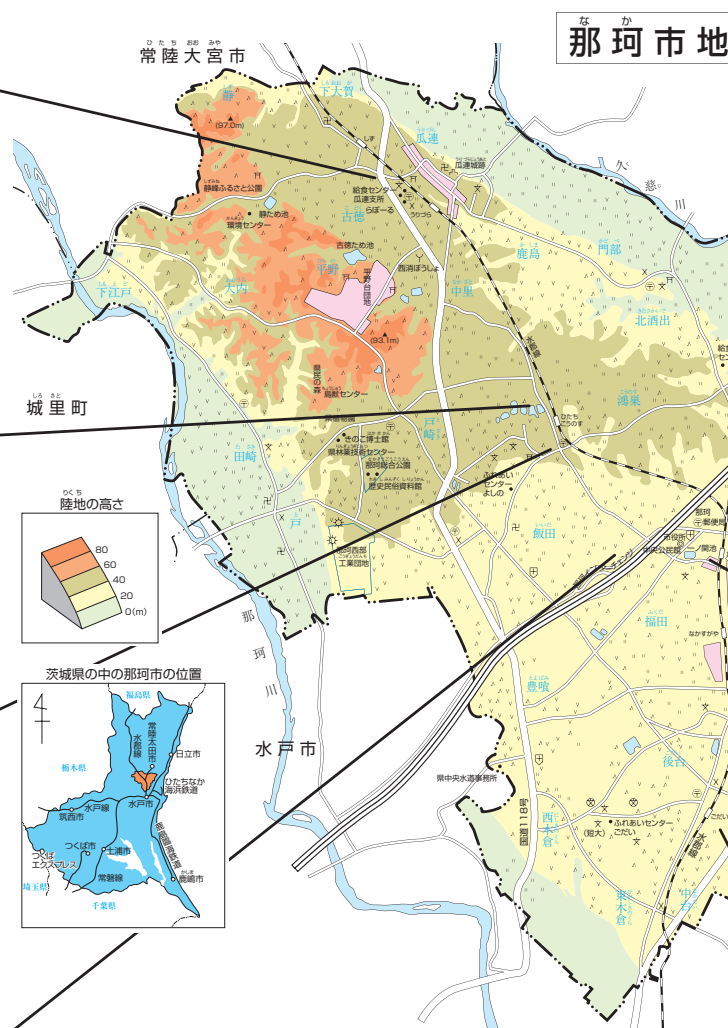
那珂パパイア



ほ い も
干し芋



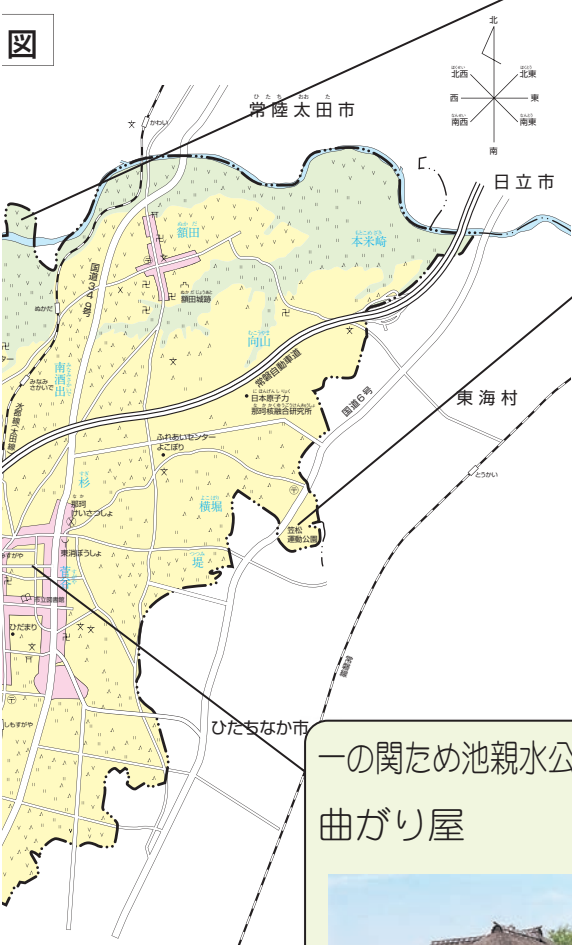
那珂かぼちゃ



「見どころ・イベント」

て人口が増加しています。茨城県植物園や鳥獣センター、県施設も充実していますし、白鳥の飛来する古徳沼や一の関たけ池の光スポットにも恵まれています。

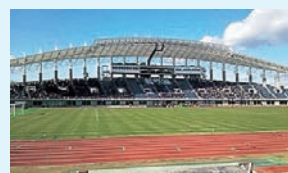
図



あはら 栗原釣り場



笠松運動公園
スポーツ施設



笠松運動公園
イチョウ並木



一の関たけ池親水公園
曲がり屋



月見の会



一の関たけ池



清水洞の上公園



那珂市には、
美しい自然や
見どころがい
っぱい。楽しい
イベントも盛
りだくさん！



ち い き じ ま ん
那珂市の地域自慢 No.2

那珂市は近年、水戸市やひたちなか市のベッドタウンとし
 民の森など公営のテーマパーク、笠松運動公園などスポーツ
 め池親水公園、八重桜が咲きほこる静峰ふるさと公園など観

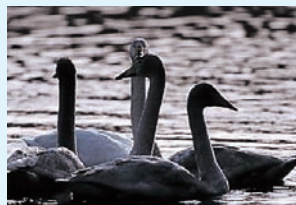
夢あかり



静峰ふるさと公園



古徳沼



茨城県植物園
 ナイトガーデン



茨城県植物園



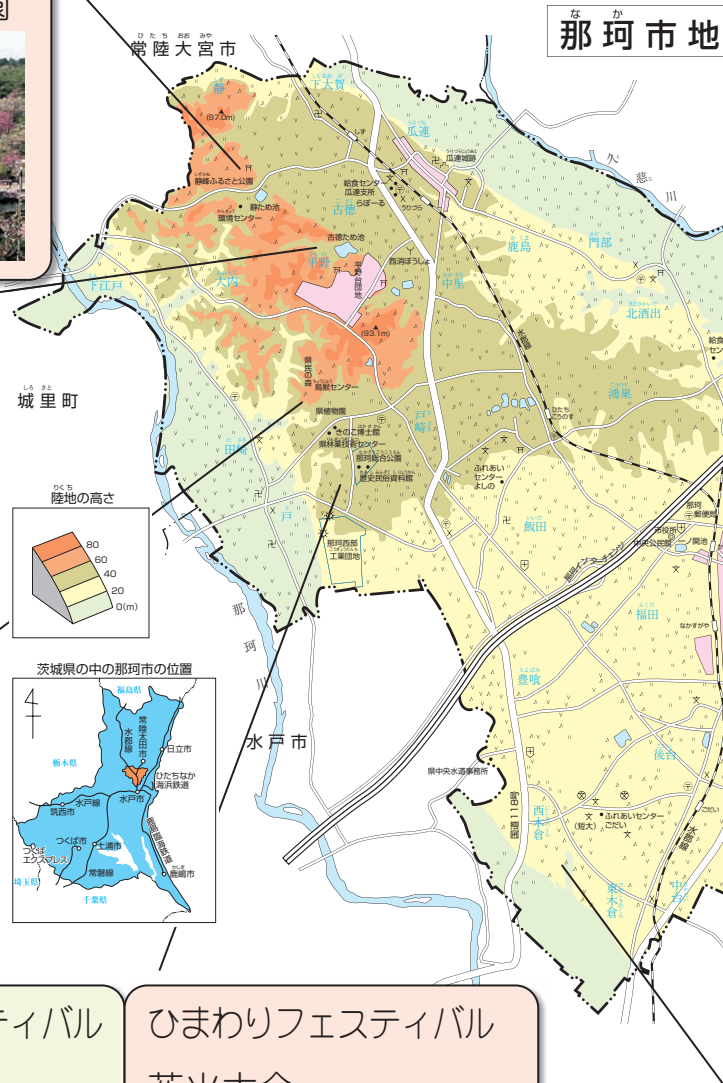
きのこ博士館



ひまわりフェスティバル
 ひまわり畑



ひまわりフェスティバル
 花火大会



「古くから伝わるもの」

大昔から多くの人々の生活が営まれてきました。中世期には、佐竹氏とつとなりました。江戸時代に入ると河川を利用した船運や街道整のある史跡や文化遺産^{いさん}の他、伝説や言い伝えも数多く残されています。

図



たつつあい話



じょうせき
額田城跡



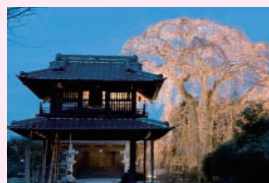
額田まつり



じょうぐうじ
上宮寺
しょうとくたいし えでん
聖徳太子絵伝



あみだじ
阿弥陀寺
しだれ桜



ナカマチクジラ



聖徳太子堂



大助祭



この他にも那珂市には昔から大切にされてきたものがたくさんあります。みなさんのお家の近くも調べてみましょう。



ち い き じ ま ん 那珂市の地域自慢 No.3

那珂市は豊かな水源を持つ栄養豊富な土に恵まれた高台に位置し、
が額田城を築城し、その後時代を越えて関東の政治的重要な場所のひ
備が進み、文化交流も盛んに行われました。そのため、歴史的にも価値

静神社
秋の大祭



かどべ
門部ひよつとこ踊り



常福寺
にじゅうろくやそん
二十六夜尊



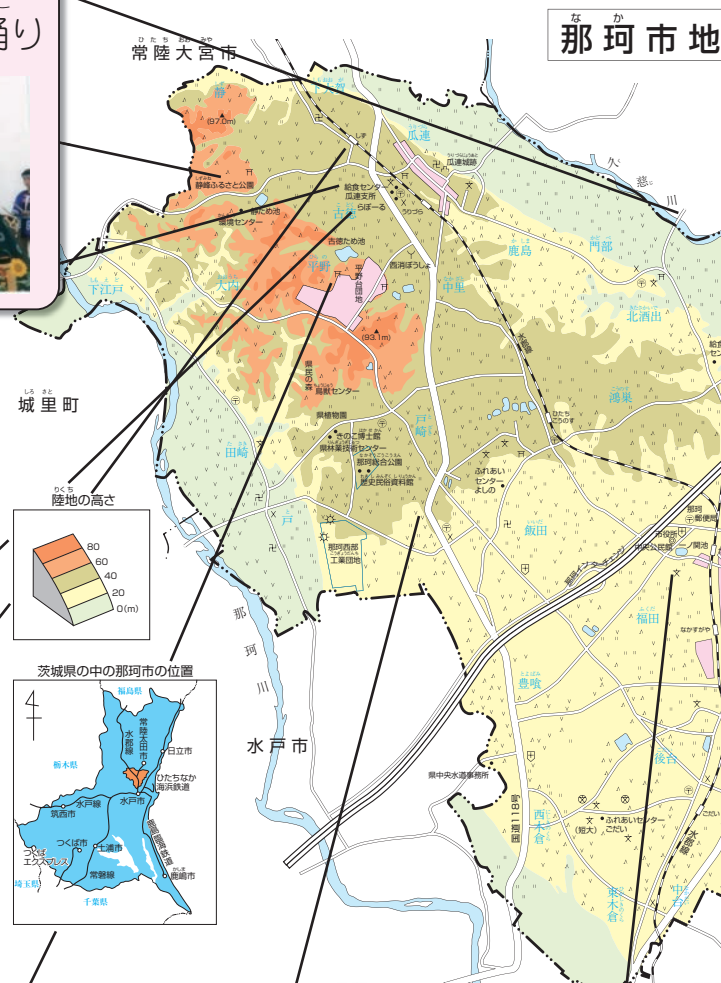
四ひきのきつね



しづおり
倭文織



静・古徳古道



みんぞく
歴史民俗資料館



那珂のひなまつり



★民俗資料館では、
那珂市の歴史を
学ぶことができます。

地域の発展に尽くす — 宮本 逸三 —

代議士

戦前、国民の参政権を反映して当選した国会議員を指して使われたことから、主に衆議院議員を指す表現。

この写真は、水郡線の常陸鴻巣駅ひたちこうのすです。上菅谷駅から太子方面に向かう最初の駅で、駅舎は集会所を併設した「常陸鴻巣ふれあい駅舎」として、地域住民の交流の場となっています。

水郡線沿線の他の駅舎と異なり、駅舎内に集会所が併設され、「ふれあい駅舎」と命名されたのには理由があります。地域活性化のため、水郡線をこの地に通すことに尽力した一人の人物、宮本逸三の活躍です。「ふれあい駅舎」建設には、彼のどのような思いとドラマが秘められているのでしょうか。

明治四十四年（一九一一年）三月、宮本は那珂郡選出の代議士根本正しょうらと協力して郡山水戸間の鉄道敷設ふせつ工事を国家事業として可決させました。海産物の内陸輸送の便を図ると同時に、鉄道の敷設で周辺地域の活性化を進めるのが目的の一大事業です。

「これで、地域の暮らしを少しでも豊かにすることができれば……」

議員達との協力だけでなく、当時の県知事岡田宇之助うのすけへの陳情ちんじやうなど宮本の努力が実を結んだ瞬間だったのです。

しかし、事態はそううまくは運びませんでした。大正五年（一九一六年）、それまでの内閣から新しい内閣に変わると、突然、水郡線案は建設延期とされてしまうのです。主な理由は、建設用地と予算の確保の目途めどが立たなかったことといわれています。

「このまま鉄道の敷設が遅れてしまつては、いつまでも暮らしは良くならない。」

そう考えた宮本は、早期の鉄道開通のために水戸鉄道敷設に協力をしていくことになりました。

まず、常陸鴻巣駅の敷地や周辺道路の敷地として自分の所有する土地を寄付提供しました。



水郡線敷設

（常陸鴻巣駅：那珂市歴史民俗資料館）

四百円

大正五年当時の四百円は、現在の約二百万円程度。

※諸説有り

「この地になんとしても鉄道を。」

その一心で行ったことでした。

駅舎建設の段階で、また別の問題が発生します。駅舎建設費が総額千二百円も不足していたのです。宮本は村議会に交渉し、村費で八百円を負担してもらうことが決まりました。しかし、まだ四百円の不足です。それならばと、宮本は残りの金額を自ら寄付したのです。

こうして、鴻巣駅舎は大正七年（一九一八年）六月に建築され同月瓜連駅も続き、十月には常陸大宮駅も完成して水戸鉄道の水戸～常陸大宮間が開通したのです。

地域の発展を夢見て、自らの私財をなげうってまで駅舎の建設に尽力した宮本逸三。

今では静かにたたずむ「ふれあい駅舎」が彼の熱い思いの結晶として残されています。

宮本逸三

一八五九年（安政六年）茨城県金砂郷村（現在の常陸太田市）に生まれる。一八七六年（明治九年）十八歳の時、鴻巣村（現在の那珂市鴻巣）の宮本家の養子になる。一八八五年（明治十八年）二十七歳の若さで茨城県議会議員に当選し、県政の融和と発展に尽くす。その後一九一七年（大正六年）には衆議院議員となり、国会議員の立場から茨城の発展に努めた。



「那珂市ゆかりの先人たち」より



マイナスからの脱却

— 岩上 二郎 —
いわかみ にろう

「今日はどの本を読もうかな。」

七年生のさとはは、朝の読書タイムの本を探しに、オープンスペースにやってきました。何気なく背表紙のタイトルを目で追っていると、いくつかの本に、他のものとは違ったラベルが貼られていることに気がつきました。

「岩上：じろう？図書：？そういえば、瓜連小学校にも同じような本があったなあ。」

「それは、岩上二郎さんと読みます。瓜連地区の出身で、茨城県知事を務めた方ですね。」

「あっ、鈴木先生。」

さとはに声をかけたのは、社会科の鈴木先生です。

「地域の偉人を知ること大切ですね。岩上二郎さんについては、この本に詳しく載っていますよ。」

鈴木先生はそう言って、一冊の本を差し出しました。



農工商全

農業と工業が両立しながら開発が進む様子を示す、岩上氏が考えたキャッチフレーズ。

岩上二郎は、大正二（一九一三）年十一月二十九日、瓜連村古徳（現那珂市）に父孝太郎・母とくの長男として誕生しました。昭和二十二（一九四七）年、二郎が二十三歳の時、地域の方々に応援され瓜連町長に当選しました。昭和二十六（一九五一）年に町長を辞任してアメリカ合衆国ペーダーイン大学へ留学し、地方自治や社会福祉を研究しました。昭和三十（一九五五）年四十二歳で帰国した二郎は、再び町長に復帰しました。その後、昭和三十四（一九五九）年、社会党及び茨城県興農政治連盟の支援を受けて茨城県知事選挙に出馬、当選しました。

二郎は「農工商全」を合い言葉に、次々と地方発展の政策を打ち出し、実行していったのです。

「茨城の発展に貢献した人が、瓜連出身だったなんて。」

さとするは、驚いた表情をしながら言いました。

「そうですね。今の茨城の産業発展の基礎を築いたのは、岩上知事と言えるかもしれませんね。」

鈴木先生は、感心するさとするの顔を見ながら、さらに続けました。

漂砂

海岸付近の浅い海底に、波の作用によって砂や小石が堆積する現象。

「特に、『鹿島開発』は有名です。知事就任当時、岩上知事が感じたのは、茨城の開発の遅れでした。関東の他県と比較しても、土地活用や気候の条件で見劣りする部分はない。しかも、首都圏に近く、太平洋に面しており、海洋交通を生かす利点もあります。茨城はまだまだ発展の可能性があったのです。」

そこで目をつけたのが鹿島開発です。人工の港を造ること、一大臨海工業地帯を造ること、壮大な計画が動き出しました。でも、開発がすぐにうまくいったわけではなかったのです。波が運んでくる漂砂の問題や、民有地を買収するための資金問題がありました。他にも一筋縄では解決できない問題が山積みだったそうです。

射爆撃場

現在のひたち海浜公園周辺には、昭和二十一年から昭和三十八年までアメリカ空軍の射爆撃訓練場があった。

それでもね、どんな困難にぶつかろうとも、岩上知事は、鹿島開発をあきらめなかったそうです。」

「どうして、そこまで鹿島にこだわったんでしょうか。」

さとするは、思わず疑問を口にしました。

「それは、きっと、臨海工業地帯を作りたいという思いだけではなく、鹿島開発をおして、茨城の全ての人々に勇気と希望を与えたかったんじゃないかなと思います。当時、県内で開発が進んでいなかったのは鹿島地方だけではありませんでした。発展させたいと願う地域はたくさんあったのです。鹿島開発を成功させることで、発展を期待する県民全体に希望を与えたい、という強い思いがそこあったんじゃないかと思います。」

「なるほど…。先生、この本には岩上さん本人の言葉ものっています。」

鈴木先生は、さとするから本を受け取ると、さとするが指した部分に目を落としました。

自分の政治家としての諸政策は、幼児体験に基づく「マイナスからの脱却」^{だっきやく}が根底にあった。主な政策としてあげることができる「農地解放」「無電燈部落解消運動」「鹿島開発」「筑波研究学園都市建設」「米軍水戸射爆撃場^{しゃばくげきじょう}返還運動」「田園都市構想」「霞ヶ浦用水事業計画」「重度心身障害者施設コロニーの建設」などはすべて「貧困からの解放」——つまり「マイナスからの脱却」を目指したものである。



鹿島港（鹿島港湾・空港整備事務所提供）



「那珂市ゆかりの先人たち」より

岩上二郎

一九一三年（大正二年）茨城県那珂市瓜連に生まれる。水戸高等学校から京都帝国大学法学部へ進み、卒業後はブリジストンに入社。その後、アメリカへ留学し、帰国後は瓜連町長を経て第二代茨城県知事となる。農耕両全をスローガンに、茨城県の産業や教育の発展に尽くした。市内の小中学校にある岩上文庫は岩上氏の寄贈による文庫である。

「『マイナスからの脱却』、この精神が今でも茨城の各地で受け継がれているんですね。岩上知事は教育にも貢献した方です。清真学園の初代理事長を務めたり、今みんなが読んでいる本なども提供してくれたりしています。」

「そうですか…。この岩上図書には、そんな岩上さんのメッセージが込められているんですね。那珂市に育つ僕たちは、これからも岩上さんの思いを、大切にしていかなければならないですね。」

そう言って、さとはは再び岩上二郎図書に手を伸ばしました。



伝統の文化を守る

「倭文織り」

「楽しみだなあ。今日はどんなものを作るんだろう。」

夏の照りつける日差しの中、隆はらぼーるに向かっていました。今日は「ふるさと教室」で「倭文織り」の作品づくりをするのです。隆は小学校のクラブ活動でも「倭文織り」クラブに参加しており、いつも以上に張り切っていたのです。

倭文織り
楮こうぞやカラムシなどの
自然植物繊維せんいを使用した織物。

会場に着くと、何台もの織機しよつぎが並べてあり、すでに二十人くらいの小中学生が集まっていました。

「よく来たねえ。」

聞き慣れた声に振り返ると、隆の家の近所に住んでいる寺門さんでした。寺門さんは小学校の織物指導にも来てくださっていて、いつも優しく隆に話しかけてくれます。

「そういえば、寺門さんはどうして倭文織りを始めたんですか。」

「織物についての知識を広める目的の公開講座に参加したのが、始まりかな。『倭文織り』という織物が、那珂市にも存在していたことが分かって、たくさんの文献を調べたんだよ。だんだんルーツが分かってきたのだけれど、残念ながら布そのものは発見できなかったの。本物がない中で、倭文織りを復元しようという取り組みは、手探りでの活動がずっと続いたわ。誰にも教わることができないから、自分たちで一つ一つ試行錯誤しこうさくごをしながら復元活動をしていったんです。他県への研修へも行ったわね。」

「なるほど、本物が残っていないのにそれを作り出すというのは本当に大変なことですね。いろいろなことを試した成果として、今の倭文織りがあるのですね。」

隆が感心していると、寺門さんは続けて教えてくれました。

「もっと大変なのは、糸にするまでかなあ……。一年に一回、寒い時期（一月～二月）にだけ作業をするので冷たい水

楮こうぞ

古くから和紙材料として知られており、今日でも和紙の主要原料となっている。

手しごと

那珂市瓜連地区で倭文織りの技術を研究、伝承している市民グループ。

を使うことになり、とても大変なの。原料も楮こうぞから育てているので、夏の暑い時期も楮の収穫や世話に手間がかかるのよ。でも、作品が出来上がったときはとても嬉しいわね。自然の材料を使った作品はやっぱりいいものだからね。手間がかかっている分よけいに嬉しいのよ。」

「一つ一つ原料から作ることに意味があるのですね。」

「そうだね。その嬉しうれさや大変さをみんなに味わって欲しいんだよ。」

寺門さんと話していると、近くにいたおじさんに話しかけられました。『手しごと』代表の田中良治さんです。

田中さんは、教室の初めのあいさつでこんなことを話していました。

「公民館活動として始まったため、現在は那珂市の方のみが参加しています。これからは茨城県内に活動を広げていき、ゆくゆくは全国に『倭文織り』を広めていきたいと考えています。せっかく自分たちの地域に伝わるもの



ですから、この先もずっと伝承していきたいですね。
近年では、「ふるさと教室」として小中学生に織物を指導したり、オークリッジ交換留学生の体験活動としても取り上げられています。最近とても嬉しいことがありますね。瓜連小学校の児童だった方が、結婚して水戸市に移り住んだのだそうです。その方が自分の子どもを連れて倭文織りの体験に来てくれたんです。地道な活動が少しずつでも実を結べばと考えています。」

「さあ、それでは始めましょうか。」

田中さんの声がかかり、いよいよ倭文織りの教室が始まります。隆は、いつも以上にやる気に満ちて織機に向かいました。

倭文織り

倭文織は楮やカラムシなどの自然植物繊維せんいを使用した織物で、昔朝廷にも献上されていた。
倭文織は、中国から北九州に伝わり、こちらに移り住んだ人々により瓜連に伝えられたといわれる。この古い織物を復元しようと活動が続けているグループがある。



瓜連小学校（倭文織りを習う様子）

二十五万本のひまわり畑

「すごい、やっぱり広いな。」

那珂市のひまわり畑
市が地域の農家に協力を依頼し、複数の農家が参加して栽培しているひまわり畑。開花期には約二十五万本のひまわりが咲き誇る。

それが実際のひまわり畑を前にしたばかりの感想だった。僕たちは総合的な学習の時間の取組で、職場体験学習を進めている。グループのテーマは「働くことについて考える」というものだった。体験する職業として選んだのは農家の仕事。今の僕たちの感覚では、ある意味一番遠いところにある職業だからだ。農業に取り組む人の思いを知ること、「働く」ということの意味に近づけるかもしれないと考えたのである。そういうわけでぼくを含めた三人のメンバーは、総合公園近くの広大なひまわり畑に来ていた。総合公園近くの広大なひまわり畑は、地域の農家の協力を得ながら栽培している。八月の末に開催される那珂市の夏のイベント、「ひまわりフェスティバル」の舞台となるひまわり畑である。今日は、その協力農家の一軒である鈴木さんの畑で、職場体験を行うことになったのだ。実際の農業を体験するのが初めての僕たちにとって、目の前に広がる広大なひまわり

ひまわりフェスティバル

那珂市のひまわり畑を中心に、毎年八月下旬頃に開催されるイベント。ステージイベントや露店、花火大会などでにぎわう。



二十アール

二千平方メートル。
一アールは一辺が十メートルの正方形の面積で百平方メートルある。

畑は、完全に未知の世界だった。

「畑は全部で二十アールあります。今日は、できる限りその雑草取りをお願いします。やり方としては、まず、一人一本の列を担当して…。」

作業方法を説明する鈴木さんの話を半分以上うわの空で聞きながら、心の中は期待と不安で一杯だった。

除草作業が始まった。作業開始後しばらくは、それでもなんとか自分の分担だけはやり遂げようという責任感もあり、作業を進めた。しかし、徐々にペースは落ち、その成果にも荒さが目立つようになってきた。振りかえって見ても、自分の足下に向かうにつれ、明らかに雑草の取り残しが目立っていた。僕は地面に座り込み、大きなため息をついた。一筋の汗があごの先から地面に落ちる。

「ここまでしないとダメなのかな…。」

つい、そんな言葉が口について出てしまう。わかってはいる。ひまわりにとって、雑草がない方が成長にいいことは。小学校の理科の授業でも学習していたし。

でも、そんなことじゃなくて、今僕の心に浮かんでしまうのは、この作業の別の部分の意味だ。うまくは言えないけど…。

「休けいの時間だよ。」

その時、鈴木さんの声があった。僕は、ふっと大きな息を吐き出し、立ち並ぶひまわりの上に顔を出した。その時、鈴木さんの姿が意外にも、かなり遠い所にあるのを見てびっくりした。

「同時にはじめたのに、鈴木さんはあんなに遠くまで進んだのだろうか。」

僕は思わず左右を見渡した。すると、それほど離れていない場所に立っている友達と、目が合った。ぱっと見開いたその目の中に、僕と同じ驚きと戸惑いが浮かんでい



た。改めて目の前に広がるひまわり畑を見渡す。何となく、今日の最初に見たときよりも、畑はさらに広く見えた。休けい中、僕は思い切って鈴木さんに質問をぶつけた。

「なぜ、ひまわり畑づくりに協力する気になったのですか。」

鈴木さんは少し困ったような顔をして、一度僕の顔を見た。そして、目を伏せると、右手と左手をしっかりと胸の前で組みながらじっと考え出した。やがて、組んだ指を開き、手のひらを見つめながら、ゆっくりと、かみしめるように語った。

「誰かの役に立ちたい、からかな。」

そう言うと、鈴木さんは照れたようににっこりと微笑み、僕たち三人の顔を順番に見つめた。

その答えは、僕たちにとってなかば予想していた答えではあった。しかし、納得できる答えとはいかなかった。僕たちは何となくお互いの顔を見渡し、釈然とし^{しやくぜん}ない思いを抱えて黙りこんだ。

すると、そんな僕たちの思いを知ってか知らずか、鈴木さんは、一瞬ひまわり畑に目を向けた後、僕たち三人に向き直り、笑顔のままで話し始めた。

「少なくとも、今はお金のためではないよ。かといって誰かに認めてもらいたいかからでもないです。私は数十年来、農業一筋で生きてきた人間です。自分にできるのは、土とかかわっていくことです。目の前に、自分にできる畑仕事があるなら、取り組まない自分より、取り組む自分でいたいと思います。それが、誰かのためになるなら、なおのことありがたいですね。私にとって、働くとはそういうことです。」

そう言った鈴木さんの言葉は力強く、笑顔は、とても誇らしげに見えた。何かとてつもなく大きな仕事を成し遂げてきた人のように見えた。僕は、鈴木さんの言った言葉の全てを理解できたわけではないし、すっきりと納得した訳



ではないけど、少なくとも何を納得すればよいのかは、わかったようないきがした。

「よしっ、やるか。」

鈴木さんは、僕たちの顔を見渡しながら大きな声で言った。僕たちは、声をそろえて、

「はいっ」と返事をした。

三人は、目の前に広がるひまわり畑に向かって走り出す。僕は、ひまわりのうねの手前で一度立ち止まると振り返った。そして、大きくぺこりとお辞儀をすると、鈴木さんに向かって手を振った。鈴木さんは、にっこり笑って手を振り返してくれた。



ひまわり畑の様子



ひまわりフェスティバル

「なかひまわりフェスティバル」は、静峰ふるさと公園で行われる「八重桜まつり」と並び、那珂市の代表的なまつりの一つとなっている。

約四ヘクタールの畑には二十五万本のひまわりが咲き誇り、見晴台からの眺めは圧倒的な美しさである。メイン会場となる那珂総合公園では、様々なステージイベントや露店、花火大会などが行われ、多くの観客が訪れる。

阿弥陀寺あみだじのしだれ桜

阿弥陀寺

鎌倉時代（一二一七年）に創建された親鸞しんらん聖人ゆかりのお寺。境内には樹齡けいだい三二〇年のしだれ桜がある。

夜の八時を過ぎているというのに、駐車場にはまだ車の出入りが見られた。

僕は祖母の手を引きながら、ゆるい傾斜の坂道を上った。夜桜見物の人たちとすれ違った際に、祖母は立ち止まり、誰かを探すようにその人たちを見送っていた。

ようやく登り切ったその先に、桜はあった。樹齡三百年のしだれ桜は、金色に輝く満月の光に照らされ、今を盛りと満開の花を開かせて、ゆう然としていた。春の夜風にゆれる度、長い枝に咲き乱れる花びらがきらきらと輝いている。僕はただ、その姿に圧倒された。

「夜桜を見たい。」

と突然言い出したのは、今年で八十歳になる祖母であった。普段は物静かで、ぜいたくなと言わない祖母が、何を思ったのか急に言い出したのは、テレビのお天気キャスターが、『今日は満月です。』という話題をふった時だった。一瞬、祖母以外の家族全員が顔を見合わせた。しかし、すぐに父が、何かに納得したように頷いて、「おばあちゃん、阿弥陀寺のしだれ桜のことですか。おばあちゃんが生まれた街にある、あの桜の木。あの桜が見たいんですね。」と、やさしく言った。

祖母は、さも嬉しそうに、にっこり微笑んだ。

寺の境内には、数名の見物客がいたが、誰もが、桜を遠巻きにし

しだれ桜

桜の一種で、枝がゆるく垂れかかる桜の総称。そうしよう



阿弥陀寺のしだれ桜（鴨志田氏提供）

てひっそりとたたずんでいた。まるで一枚の絵のようなその境内の有様に、みいられているかのようだった。

『おばあちゃんはきつと、この満開の桜の姿を僕たちに見せたかったんだろうな。』

月の光に照らされ、きらきらとまたたく桜の花を見上げながら僕は思った。

その時、かたわらから僕に問いかける祖母の声がした。

「トシオ。トシオは、この桜の木の美しさを感じるかい。」

祖母の問いは突然で、何を聞かれているのか一瞬わからなかった。とりあえず、僕は素直な感想を答えた。

「うん。すごくきれいだと思うよ。しだれ桜の花って初めて見たし、下に向かって流れる花がピンクのカーテンみたいに見えるし…。」

すると、祖母は僕の答えを聞き終わるか終わらないかのタイミングで話し出した。それはまるで、独り言のようだった。

「私は、小さい頃からこの桜の木を見て育ったんだよ。弟を背負い、妹の手を引きながら子守の最中に。それから、畑仕事や野菜を売りに行った帰りなんかだね。春の、花の季節だけじゃなく、夏も秋も冬もね。朝だったり、夕方だったりいろんな時に来た。でもね、いつもこの桜の木はあるんだよ。ここに、こうしてどっしりとね。花が散り、若葉の季節になっても。秋になり、葉が色づいてやがて落ちていき、みんな無くなっても、変わらずにどっ



阿弥陀寺のしだれ桜（鴨志田氏提供）

しりとね。自分の姿のありのままを、全てさらけ出しても、誇らしげな姿で立ち続けている。誰に見られても、見られなくても変わらないんだよ。この桜の木の美しさはね、そんな美しさなんだよ。」

祖母はそこまで一気に話ききると、何かを懐かしむように桜の木を見上げ、一人語りを終えた。僕は思わず、『そんな美しさ』ってどんな美しさなのかを聞き返したくなって、祖母を見返した。祖母はまだ、じっと目を細めて、満開の夜桜の木を見上げていた。その姿に僕ははっとした。そして、問い返すのを止め、同じように、桜の木を見上げながら考えた。

この美しい花もやがて散り、若葉の季節を迎える。四季折々に姿を変える桜は、本来一日として同じ姿はない。そして次の春が来れば、また美しい花を咲かせる。こつこつと月日を重ね、このしだれ桜はそうして三百年生き続けてきた。当たり前のように、一年一年を繰り返しながら…。祖母は、幼い頃から日々の生活の中で、その姿を見て大人になっていった。

「だから…。」

僕は、思わず声に出してつぶやいていた。その声が聞こえたのか、祖母が僕の方を見ていた。僕は少し大きな声でこう言った

「おばあちゃん、また来ようよ、ここに。その時は、おばあちゃんが言う『そんな美しさ』が、少しはわかるようになっていくかもしれないから。」

祖母は、支えている僕の右手の甲を二回ポンポンと軽くたたくと、にっこり微笑んだ。

阿弥陀寺のしだれ桜は、三百年変わらぬその姿を、いつまでも満月にさらして、美しく輝いているのであった。

那珂市額田のしだれ桜

戦国時代この地域で活躍した額田氏の居城額田城跡に隣接する阿弥陀寺の境内にある一本のしだれ桜。本堂の正面にそびえ立つ桜の木は、由緒あるこの寺にとつて、象徴的な存在となっている。開花の時期には、近隣の市町村をはじめ、他県からも、その美しい姿を求めて多くの見物客が訪れる桜の名所ともなっている。開花時期には、夜のライトアップも行われ、幻想的な姿を見せる。

教育にかけた命

— あおやま
青山 信一郎 —

碑

後世に伝えるために
先人の事跡・氏名な
どを石に刻んで建て
たもの。

昭和二十七年十月三十日、宮城県塩釜市浦戸諸島の寒風沢島にある元屋敷海岸には、数十名の教育関係者と多くの学生が集まっていた。二十二歳の若さで教育活動中に亡くなった一人の教師、青山信一郎の死を惜しむ人々である。この日、彼の死を悼み、彼の教育に尽くした純粋な思いを後世に伝えるべく、建立された碑の除幕式がしめやかに行われたのである。

塩釜女子高等学校で始まった、信一郎の教員生活は、彼の人柄そのものであった。いくつかのエピソードが、彼の死後、教え子たちによって明らかにされている。

信一郎が、何よりもこだわったのが理科の実験活動であった。きめ細かい計画を立て、実験前には必ず自分で予備実験を行った。納得できる結果が得られるまで何度も繰り返し、時には深夜に及ぶことさえあった。また、実習で校外へ出かけるときには、最低三回は事前の下見を欠かさなかったという。

何事も用意周到で慎重な信一郎であったが、反面、二十代前半の若者らしい、熱血教師ぶりも見られた。クラス対抗球技大会の前日のことである。弱気になりがちなクラスの雰囲気盛り上げるため、信一郎は雨の降りしきる中、グラウンドに生徒を連れ



殉職

職責を果たそうとして命を失うこと。



出す。そして、笑顔で生徒を励ますと、自ら先頭に立って、泥にまみれながら練習を行ったという。また、体育祭の当日は、すべての種目で、出場した生徒一人ひとりの名前を大声で呼びながら、声を限りに応援をした。そのため、体育祭が終わる頃には、信一郎ののどは、すっかり声が出なくなってしまったという。

また、進級のかかる大切な試験の朝には、何も言わずに、一言「ガンバレ!」と黒板にチョークを走らせ、生徒を励ましていた。

信一郎が二十二歳の若さで殉職したのは、彼自身二回目の、夏の合宿臨海実験二日目のことであつた。朝九時の寒風沢島元屋敷海岸は、ちょうど干潮時かんちようでもあり、ところどころに磯が現れていた。ウニやナマコ、海藻類かいそうなどの海洋動物の採集には、最適な状態であつた。信一

郎は、採集活動のポイントと注意点を説明すると、女生徒たちを磯場へと送り出した。生徒たちは、朝の冷たい水の感触に歓声を上げながら、思い思いの磯場へと散らばっていった。信一郎自身も、お目当ての海洋動物を探しながら、そんな楽しい生徒たちの様子を見守っていた。ひとしきり、採集活動が進み、そろそろ休憩時間を取ろうとしていた矢先のことであつた。信一郎から十mほど離れた浅瀬で採集活動をしていた二人の女生徒が、突然海の中に消えた。



水面をおおう海藻によって見えなくなっていた深みにはまったのである。あちこちから悲鳴が上がった。浮き輪を持って走り出す生徒が見え、助けを求めて叫ぶ声が聞こえた時、信一郎は何が起きたのかを理解した。二人が消えた深みまで猛然と駆け寄ると、一瞬の迷いもなく水に飛び込んだ。ほどなく、一人は自力で浮かび上がり、友達の投げた浮き輪にしがみついた。そして、もう一人の生徒は、信一郎に抱きかかえられるように水面に顔を出した。意識がないのか、女生徒は信一郎の腕の中でぐったりしている。信一郎は女生徒をかかえながら、それでも必死で近くの岩場まで泳ぎ着こうとしている。

「がんばれ、しっかりしろ。」

「大丈夫、大丈夫だから。」

信一郎の生徒を励ます声が、海面に響き渡る。しかし、磯場の引き潮は早く、強かった。信一郎がどんなに必死で腕を動かそうとも、岩場に近づくことはできなかった。二人は、浮いたり沈んだりを繰り返しながら、徐々に沖へ沖へと引き離されていった。そして、やがて、二度と浮かび上がってはこなかった。



汐音Ⅱ潮騒

寄せては返す波の音。

信一郎を偲ぶ声は、彼の死後、少しずつ広がっていった。はじめは、教え子たちから、やがて同僚の教師へと広がっていき、そして、とうとう宮城県全体へと広がっていった。信一郎の生きざまを刻んだ碑を作ろうという声は、そんな広がりの中で、自然と生まれてきたものであった。

快晴の松島湾に、秋の潮風に乗って、汐音しおねが広がる中、除幕式の最後は、一人の教え子の追悼ついでうの言葉で閉式となった。言葉は次のようにしめくくられていた。

追悼

死者の生前をしのび、その死をいたみ悲しむこと。

「先生、どうぞ安心して天国から見守ってください。私たちはいつまでも、青山信一郎の教え子なのです。」



けんしょう ひ ついでう
顕彰碑と追悼集会

青山 信一郎

昭和五年、茨城県那珂郡芳野村飯田（現在の那珂市芳野）生まれ。両親は高校教師で、幼いころより父と母の背中を見て育つ。小学校時代は、クラスを盛り上げるムードメーカー的な存在。旧制中学（現水戸一高）では生物・科学の分野に興味をもち、高等師範学校しはん（現筑波大学）進学後は、海洋生物の生態研究に集中する。宮城県塩釜市立塩釜女子高等学校教諭となる。



「那珂市ゆかりの先人たち」より

覚悟を決めた一瞬 ——中井川 浩——

決起

ある目的のために、決意を固めて行動を起こすこと。

クーデター

一般に武力による奇襲攻撃によって政権を奪取することをいう。

二・二六事件

一九三六年（昭和十一年）二月二六日から二月二九日にかけて、一部の陸軍青年将校らが下士官兵を率いて起こしたクーデター未遂事件。

昭和十一年二月二十六日早朝五時、中井川浩は、日課である明治神宮への散歩に出かけようとしていた。昨晚からの雪のため、東京の街はすっかり雪景色に染まっていた。しかし、そんな美しい冬の朝は、突然の報せにより、消去されてしまうことになる。

警護の警官が中井川宅の玄関先に飛び込んできた。

「中井川先生、大変です。陸軍が決起しました。クーデターです。」

日本近代史に残る、有名な二・二六事件が突然始まったのである。

中井川浩は、当時衆議院議員であり、時の文部大臣 川崎卓吉たくきちの秘書官を務めていた。彼は、このとき、文字通り命がけで川崎大臣を守り、宮中きやうちゆうに一番乗りし、内閣書記官長にかわって緊急閣議きんきうかくぎを招集したのであった。

中井川浩は明治三十三年九月木崎村門部かどべ（現在の那珂市木崎）の農家に生まれる。政治家として、また実業家として活躍し、地域の防災力向上・教育力の向上に努めた人であった。よく人に好かれる、不思議な



魅力をもった人物であったと、彼を知る多くの知人は口をそろえて言う。

衆議院議員を三期務めた彼は、国政・県政に尽力した。久慈川の改修治水工事推進や霞ヶ浦農科学校（現茨城大学農学部）の創立などは、その一つである。

二・二六事件における活躍は、そんな中井川浩の人柄を表す象徴的なエピソードと言える。

陸軍決起の報せを受けた浩は、いち早く自らが秘書官を務める川崎大臣の屋敷へと車を飛ばした。はたして、川崎大臣は無事であった。大臣は、浩の顔を見るなりこう言った。

閣議
内閣総理大臣が主催し、内閣の職務遂行に関し、意志を決定する会議。

「私はすぐに参内（さんだい）（天皇に面会すること）して、緊急閣議の開催をお願いしなければならない。中井川君、一緒に来て欲しい。」

川崎大臣は、いつになく真剣な面持ちで浩を見た。皇居の周りは、当然決起した兵隊たちで囲まれている。川崎大臣も兵隊たちの襲撃の対象になっているかもしれない。そうなれば、皇居に向かうのは命がけである。一瞬、浩は川崎大臣の顔をまじまじと見つめ直した。

「わかりました。すぐに支度（しとく）をしてください。」

浩は穏やかな声でそう言うと、大臣に向かってうつすらと微笑んで見せた。

大臣が参内の支度をする間、浩は再び近所を駆けまわり、記者時代に身に付けた取材の能力を発揮し、情報の収集を行った。いくつかの貴重な情報が得られた。

乾門
「乾門（いぬいもん）の辺りが、一番見張りの兵隊が少ないようです。車をそちらに向けましょう。もし、兵隊に止められた時は、私が車を降りて応対します。決して大臣は車を降りてはなりません。」

天皇の住まいである皇居の、北西に位置する門。

浩はゆっくりとかみしめるように大臣に向かってそう言った。そして、今度は運転手に向かい、

「万一私が撃たれた場合は、その隙（すき）に大臣を宮中に運び込め。いいな。」

一転して厳しい口調でぴしやりと言うと、それきり前を見て黙り込んでしまった。

乾門が近づいてくると、腰に剣を指した兵隊たちが目につくようになった。緊張感が一気に高まる。竹橋を過ぎ、



英国大使館前にさしかかったとき、数人の兵士に停止を命ぜられた。浩はゆっくり車を降りると、堂々と、目的を告げた。兵士は黙って見返したまま道を譲ろうとしない。すると浩は大きく一つ息を吸い込むと、

「閣僚の参内をなぜ阻止するの か！」

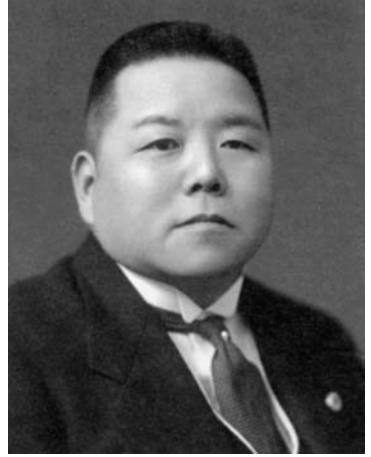
と、大きな声で兵士を一喝した。兵士は驚いた様子で、それぞれに道を開けた。その後も同じような押し問答が何度か繰り返された。浩は、車には戻らずに、歩いて車の先導をして、皇居の乾門まで進んでいった。車で僅か五分の道のりを三十分もかけてようやく門に到着し、無事皇居に入ることができた。

その三十分後、緊急閣議は招集されたのであった。

中井川浩をよく知るといふ同僚議員が、後に彼を評してこう語っている。「中井川君という人は誠に不思議な存在であった。正規な学問もしないが、それでいて極めて常識があり、口数は多くないがすぐに問題の核心を把握し、同志の信頼はもちろんだが反対派からすらも尊敬された。非常時日本の中で、実に偉大な働きをなした、近来珍しき人物である。」

中井川浩が、二・二六事件という大事件に遭遇しても、冷静に行動できたのはなぜなのか。また、人生の節目の大きな決断を迫られたときにも、その行動を選択し、激動の時代を生き抜いたのか。どのような思いで人生の分かれ道を迎え、

中井川浩本人は、政財界を引退した後も、あまり多くを語らなかったという。



「那珂市ゆかりの先人たち」より

中井川 浩

明治三十三年九月木崎村門部（現在の那珂市木崎）の農家に生まれる。

水戸の新聞社勤務の後、自ら独立して新聞社を創立。昭和二年、土浦町議会議員当選後、昭和六年、茨城県議会議員に当選。昭和七年、衆議院議員に出馬し当選。衆議院議員を三期務め、国政・県政に尽力する。

久慈川の改修治水工事推進・霞ヶ浦農科学校（現茨城大学農学部）の創立など、防災・教育面での実績を残す。

いっしょにを果たす

— 根本 正 —

代議士

戦前、国民の参政権を反映して当選した国会議員を指して使われたことから、主に衆議院議員を指す表現。

人はいくつになっても、夢やあこがれをもち、その実現に向けて挑戦する権利とチャンスがある。

幕末から明治へ、日本が迎えたかつてない激動の時代に、そんな生き方を実現した人物がここ那珂市にいた。代議士根本正である。彼の視線の先には、常に故郷茨城の若者たちの姿が見えていた。

江戸時代末期の嘉永四年十月（一八五一年）那珂市東木倉の庄屋の次男として根本正は生まれる。ペリー来航の二年前、時代が大きく動きだした時期であった。十三歳になり親類知人の紹介で水戸に出た正は、めまぐるしく変わりゆく環境の中で、ひたすら学問に励んだ。そんな中、青年期を迎えた彼の運命を変えるできごとが起こる。当時、洋行帰りの人からマッチと時計を見せられたのである。

「なんて西洋は進んでいるんだ。これからは、西洋の文化が日本を変えていく。西洋の文化を直接学ぶために、西洋の言葉を学ばなければならない。」

それまで、何かと西洋文化に興味を抱いていた正は、衝撃を受け、思い切って上京する。何とかして外国へ渡り、西洋の学問を直接学びたいと考えたのである。明治四年、正が二十歳の時だった。

当時、人脈や財力といった後ろだてのない者が、働きながら英語を学ぶということは、想像以上に困難なことであった。しかし、彼はどんなに苦しい環境の中でも、英語を学ぶための手段を、自らの力でどん欲に開拓していったのである。わずかな機会を見つけては英語を学び続け、渡米のチャンスをつかっていた。東京・神戸・横浜と次々と勉強の機会を求め、仕事と住まいを転々としていた正は、そんな生活の中で、たくさんの人々と出会う。その出会いは通して、正は英語以外にも多くのことを吸収していったのである。

横浜の外国郵便局で働いていたときであった。正は、その郵便局員の所属する団体の支援を受け、アメリカ行きの貨物船に乗り込むことになる。たどり着いたのはアメリカ、カリフォルニア州オークランド。正にとって、はじめて



の、そして念願の外国の地であった。正は、紹介された地元の人の屋敷で使用人として働き出すが、その時、自分が日本で学んできた英語が全く通じないことに大きなショックを受ける。

そして正は、英語を一から学び直す決心をし、地元の小学校に入学する。根本正、二十八歳であった。小学校で英語の基礎を学んだ正は、三十歳になり同じ地元の中学校へと進学する。そこを四年で終え、さらに高校へと進む。正にとっては、相変わらず働きながらの苦しい環境ではあったが、着々と英語の力を身に付けていくことができたのである。また、アメリカでのそうした暮らしは、国の力を高める上での教育の重要性を知る、貴重な経験ともなった。

「自分のような外国人に対しても、身分や人種の差別無く、無償で学べる機会を提供する、アメリカの教育制度は素晴らしい。」

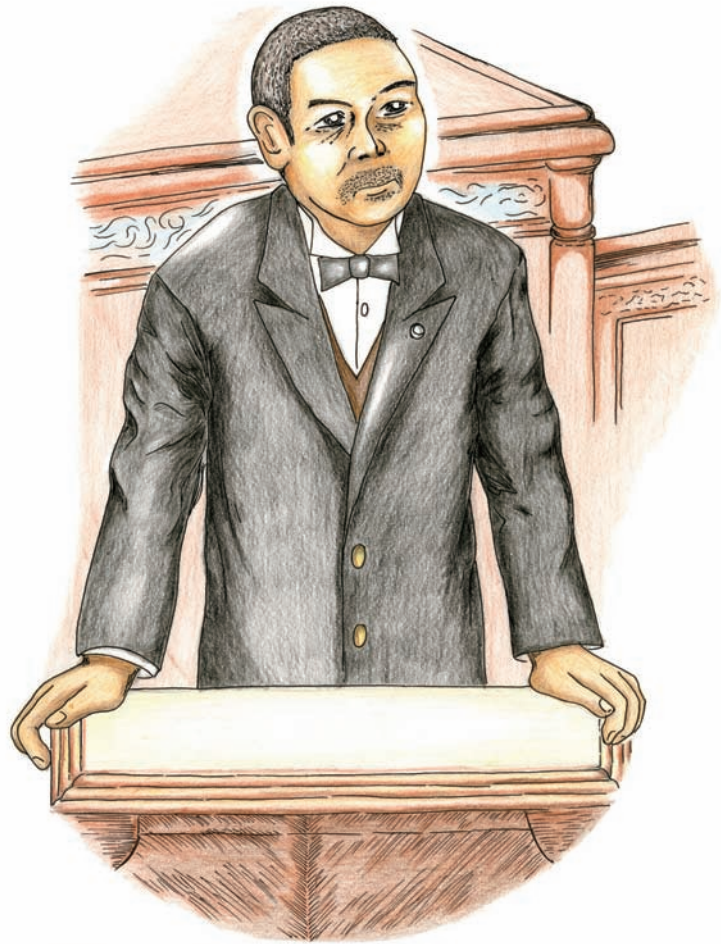
その時感じたこの思いは、後の正の代議士人生にも大きな影響を与えることとなる。

高校を卒業した正は、その努力と彼の人柄が見込まれ、バーモント大学への進学を援助してもらえることとなった。正はそこでも、猛烈に学んだ。やがて、そのバーモント大学を優秀な成績で卒業すると、いよいよ正は日本へと戻ってくる。その時、根本正は三十八歳、渡米後実に十年の月日が流れていた。

正は、やがて代議士となり、数々の法案を提出し成立させた。その中でも特筆すべきは「義務教育の無償化」と「未成年者禁煙禁酒法」の成立であろう。根本正が、「禁煙禁酒の父」、「義務教育の祖」と呼ばれるゆえんである。『人は教育の力により初めて人間となるものなり。小学校教育は教育の初歩なり。』

バーモント大学

一七九一年に創立、アメリカニューイングランド州の大学。「バーモント」とは、ラテン語で「緑豊かな山」という意味を持つ。



未成年者禁煙禁酒法

正式には、未成年者
喫煙禁止法及び未成
年者飲酒禁止法。満
二十歳未満の者の飲
酒の禁止に関する日
本の法律一九二二年
(大正十一年)に制
定。

た根本正は、最後の選挙で、わずか三十三票の僅差で破れる。彼は、その後あっさり政界を引退するが、その際、彼は自らの支持者に対して、

「落選を感謝す。」

という言葉を残している。そこには、代議士として、精一杯の努力をし、為すべきことをやり遂げた実感と感謝の思いが込められている。そして、次世代を託した者たちへの彼なりのメッセージとして、様々な意味をもって語りかけている。

代議士となった正は、義務教育の必要性をそう説き、学校に通うべき子どもたちから授業料をとるのは、地域の道を通行する旅人に関税を課すことと同じだとして、無償化実現を訴えた。(※就学率は当時の児童数の三分の一以下。入学費用は現在に換算して三十万円程度。)さらに、「未成年者禁煙禁酒法」については、未来を担う子どもたちが、過酷な労働の末に酒やたばこにおぼれていく姿を憂慮し、他の代議士からの猛反発を押し切り成立させた。これには、実に十九回の法案提出と二十一年間という月日を要した、まさに執念の成立であった。

他にも、身近な貢献としては、水郡線の敷設をはじめ、那珂湊港の開設や利根川の治水工事など、地域に根ざした業績も多数存在する。国会議員として、様々な業績を残してきた根本正であるが、彼の人生は、そんな華やかな業績とは異なり、苦勞と忍耐の連続であった。

アメリカからの帰国後二十六年の長きに渡る代議士生活を送っ

根本 正

現在の那珂市東木倉に生まれる。二十七歳の時、単独でアメリカに渡り、小学校から学び直し大
学まで卒業する。四十六歳で衆議院議員になると、青少年の健全育成関係や茨城の地域振興のため
の政策を次々と打ち出す。特に「義務教育の無償化」「未成年者禁煙禁酒法」成立については、政治
生命を賭けて取り組んだ。他にも、水郡線の敷設、那珂湊港の開港、利根川の治水工事等、茨城の
地域振興に貢献する多くの業績を残した。



「那珂市ゆかりの先人たち」より

那珂市の名誉市民

那珂市では、四人の政治家の業績をたたえとともに、一人ひとりが先人に学んで明るい希望に満ちた社会づくりにまい進する決意を新たにす
目的で、この四人の政治家を、名誉市民として紹介しています。



名誉市民章

根本 正 — 不屈の政治家



義務教育の無償化をはじめ、未成年者の禁煙禁酒法を成立させました。健全な青少年の育成に力を尽くした根本正は、若い頃から世界に関心をもっていました。その思いが後に大きな成果を生むきっかけとなりました。

ふまれても
根強く忍べ路芝の
やがて花咲く
春をそこまで

この歌を、根本正は自らの生き方の生涯の指針として大切にしています。

中井川 浩 — 情けに深い正義漢



中井川浩は、警察官であった父親ゆずりで、とても正義感の強い人でした。新聞記者時代には、当時の県の政治体制に対し、記事を通して堂々と自らの正義を主張しました。政治家に転向した後も、その正義の心は変わらなかったと言われています。

「不言実行ただ一筋」

中井川浩の支援者が作った歌の一節です。人の悪口は言わず、多くを語らずにひたすら行動に移す。中井川の人柄を表す言葉です。

宮本 逸三 — 貫いた郷土愛



宮本逸三の父親は当時の芳野村（現在の芳野地区）の初代の村長を務めていました。父子二代に渡って地域の発展に力を尽くしました。宮本逸三が水郡線の敷設をはじめ、那珂郡役所（今の市役所）設置など、那珂市の発展に、特に力を注いだのも、この父親の影響があったと考えられます。

「一心協力」

この言葉は現在も宮本家に伝わる大切な言葉です。水郡線敷設に尽力した宮本の努力が象徴される言葉となっています。

岩上 二郎 — マイナスからの脱却



生まれつき体が弱く、控え目な性格だった岩上二郎は、中学時代の部活動の先生の一言で、発想の転換を果たしました。それまで弱点だと考えていた左利きを、逆に生かす方法を考えたのです。「マイナスからの脱却」という彼の発想はこうした経験から生まれたと言えます。

一粒の麦
地に落ちて死なば
豊かな実結ばん

これは聖書の一節です。この言葉を岩上二郎は座右の銘とし、政治家としての心構えとしました。

那珂市ゆかりの人々

水戸光圀



水戸光圀像
(常磐神社所蔵)

「水戸の黄門様」として有名な徳川光圀は、第二代水戸藩主でした。「大日本史」の編纂は光圀の有名な業績の一つです。那珂市内には光圀ゆかりの神社やお寺が数多く残されています。

徳川 斉昭



(大洗町「幕末と明治の博物館」所蔵)

水戸藩九代藩主である斉昭は、新しい学問や政治の仕組みなどをいち早く取り入れた、優れた主君でした。那珂市にも度々訪れており、額田や瓜連にその記録が残されています。

藤田 幽谷・東湖親子



(東湖)



(幽谷)

(藤田東湖全集・幽谷全集より)

幽谷(父)・東湖(息子)は江戸時代中期、水戸藩を中心に広がった学問を親子二代に渡って推し進めた学者です。那珂市の飯田には藤田家のお墓が今も残されています。

吉田 松陰



(「吉田松陰全集」より)

江戸末期の学者で松下村塾という学問所を開きました。明治維新に大きな影響を与えた人物を数多く輩出しています。松陰は学問を学ぶために水戸を訪れており、その際何度か那珂市にも足を運んでいます。

源 義家



源義家は、平安時代当時「天下第一武勇の士」と言われるほどの武将でした。東北地方の戦乱を平定する際は、那珂市付近を通過したと言われ、市内には多くの伝説が残されています。

細谷 一郎



(「細谷一郎作曲全集」より)

那珂市鴻巣出身の作曲家で、NHKの専属作曲家として活躍しました。ラジオやテレビ番組のテーマソングなどを数多く残しています。那珂市内の小中学校の校歌も多数作曲しました。



なかつこ宣言

(平成二十一年五月十八日制定)

私たち小学生は、社会の一員としてよりよい未来をつくるため、豊かな大地と緑を大切にし、社会のルールを守り、那珂市の花「ひまわり」のように、明るく元気に育つことをめざし、宣言します。

- 一 元気よくあいさつします。
- 二 だれにもやさしくします。
- 三 きまりを守って生活します。
- 四 がまん強くがんばります。
- 五 夢に向かって努力します。
- 六 ふるさとを大切にします。

那珂市各小学校代表児童
「なかつこ宣言策定委員会」



ひまわり 那珂市道徳郷土資料集

資料番号	資 料 名	内 容 項 目
①	四ひきのきつね (1、2年)	正直、誠実
②	もえちゃんともみの木 (1、2年)	自然愛護
③	よくがない (たっつあい話) 3年	善悪の判断、自律、自由と責任
④	曲がり屋の見学 3年	伝統と文化の尊重 国や郷土を愛する心
⑤	古徳沼のしぜんをまもる 4年	自然愛護
⑥	人を思う気持ちー秋山美代 4年	親切、思いやり
⑦	那珂かぼちゃ 5年	希望と勇気、努力と強い意志
⑧	さつまいもの神様ー白土松吉 5年	真理の探究
⑨	大助祭 6年	伝統と文化の尊重 国や郷土を愛する心
⑩	静のムクノキ 6年	感動、畏敬の念
⑪	地域の発展に尽くすー宮本逸三 7年	伝統と文化の尊重 国や郷土を愛する心
⑫	マイナスからの脱却ー岩上二郎 7年	自主、自律、自由と責任
⑬	伝統の文化を守る～倭文織り～ 8年	伝統と文化の尊重 国や郷土を愛する心
⑭	二十五万本のひまわり畑 8年	勤労
⑮	阿弥陀寺のしだれ桜 8年	感動、畏敬の念
⑯	教育にかけた命ー青山信一郎 9年	よりよく生きる喜び
⑰	覚悟を決めた一瞬ー中井川浩 9年	公生、公平、社会正義
⑱	こころざしを果たすー根本正 9年	希望と勇気、克己と強い意志
コ ラ ム	那珂市の地域自慢No. 1 ～No. 3	
	那珂市の名誉市民	
	那珂市ゆかりの人々	

この本を作った先生方

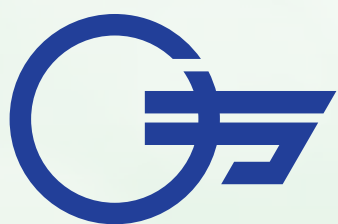
秋山 和衛 (那珂市教育委員会教育長) 仲田 昭一 (那珂市歴史民俗資料館館長)
 眞崎 涼子 (横堀小学校) 田口 司 (菅谷東小学校) 高安洋一郎 (五台小学校)
 小林 浩子 (芳野小学校) 横須賀哲也 (第一中学校) 深谷 泰弘 (第二中学校)
 栗田 元美 (第四中学校) 高野 基行 (瓜連中学校)
 那珂市教育委員会指導室 ※編集委員の勤務校は平成28年3月現在

☆この本を作るのにご協力頂いた方々 (敬称略順不同)

岩上一字、鴨志田芳未、北村明美、宮本雅三、根本正顕彰会、常磐神社、幕末と明治の資料館
 那珂市観光協会、那珂市商工観光課、那珂市歴史民俗資料館、茨城県教育委員会
 鹿島港湾・空港整備事務所、いばらき森林クラブ

那珂市道徳郷土資料集「ひまわり」

編著者 那珂市道徳郷土資料集編集委員
 発行者 那珂市教育委員会
 印刷社 有限会社スナカワ事務機/いばらき印刷株式会社



学校名	学園	学校
-----	----	----